

「木曾の蠅」考 —— 芭蕉餞別句のメッセージ ——

清 登 典 子

—

元禄六（一六九三）年五月、江戸を発つて彦根に帰藩する森川許六に送られた芭蕉餞別句のうち、「椎の花の心にも似よ木曾の旅」の句については、すでに拙稿において取り上げて検討を加え、芭蕉にとつての「椎」が山における仏道修行と結びつく素材であることを明らかにし、さらに芭蕉には隠者がその身を養うために捨う木の实および木の实のなる木の花への関心を示す句が「木曾の椽浮世の人の土産哉」（『更科紀行』）、「世の人の見付ぬ花や軒の栗」（『奥の細道』）などと見えており、「椎の花の」の句もその延長線上にある句と捉えられることを指摘した。その上で、芭蕉が「椎の花」の季語を世俗の人にもてはやされることなく山中で木の实を拾って身を養う隠者、修行者の象徴として用い、「椎の花の心にも似よ」と詠むことで、西行に代表されるような隠者、修行者の心に倣って木曾路の旅を行えよ、という許六に対するメッセージを込めて送った句である、という解釈を呈示した¹。

実は芭蕉が許六に送った餞別句は、「椎の花の」の句一句だけではなかったことが知られている。芭蕉没後、元禄十年に出された『韻塞』（許六編）に、芭蕉から許六に送られた餞別の句文が次のように掲載される。

其詞

木曾路を経て旧里きゅうりにかへる人は森川氏許六と云ふ。古しへより風雅に情ある人々は、後に笈うしをかけ、草鞋わらぢに足をいたため、破笠やぶれがさに霜露しもつゆをいとふて、をのれが心をせめて物の実まこととしる事をよろこべり。今仕官おほやけの為には、長剣を腰にはさみ、乗かけの後に鎗かたをもたせ、歩行あち若党の黒き羽織のもすそは風にひるがへしたるありさま、此人の本意にはあるべからず。

椎の花の心にも似よ木曾の旅 ばせを

うき人の旅にもならへ木曾の蠅 同

両句一句に決定すべきよし申されけれど、今滅後の形見にふたつながらならべ侍る。

末尾に置かれた許六による付記を読めばわかるように、芭蕉は餞別句として「椎の花の」と「うき人の」という二句を示した上でそのうちから一句を選んで餞別句と決定するようにと指示していたのだが、『韻塞』編集の時点ではすでに亡くなっていた芭蕉の「滅語の形見」として許六が二句をともに載せることにしたのである。

実際に餞別句が送られた当時、許六が二句のうちから「椎の花の」の句の方を選んでいたことは、彦根に帰藩した直後に書き上げて江戸の芭蕉に送った「許六自筆卷子癸酉紀行」（天理図書館所蔵）においては、詞書に続いて「椎の花の」の一句のみが置かれていることから明らかである。したがって、「うき人の」の句は許六によつては選ばれなかった芭蕉餞別句と言えるだろう。

しかし、許六によつて選ばれた餞別句である「椎の花の」の句が、芭蕉と許六との具体的、個別的な交流の事実（許六に『奥の細道』の披見を許し、西行の旅姿を彷彿とさせる芭蕉の行脚図を描かせたことなど）を踏まえただ上で、仏道修行者や隠者の旅を理想として木曾路の旅をせよ、というメッセージを込めて詠まれた句であったと捉えられるとすれば、もう一句の餞別句である「うき人の」の句の方にも、両者の具体的な交流関係やエピソードが踏まえられ、芭蕉から許六に対する何らかのメッセージが込められていた可能性が高いのではないだろうか。

本稿では、芭蕉餞別句「うき人の旅にもならへ木曾の蠅」を取り上げ、そこに込められた芭蕉の思いやメッセー
ジを読み解いてみることにしたい。

二

さて、「うき人の」の句についての従来の解釈を眺めてみると、ほぼ共通の解釈がなされてきている。たとえば『新編日本古典文学全集 松尾芭蕉集』²⁾では「これからの木曾の旅路では蠅がうるさくつきまとうだろうが、世を憂いものと覩じ、艱難辛苦の旅に風雅の心を責めた昔の文人に倣いたまえよ」という解釈が示されている。他の多くの注釈書類もほぼ同様の解釈を行っており、大きな差異は見られない。

たしかに、句中の「うき人」は詞書きに見える「古しへより風雅に情ある人々」を受けた語であろうし、「木曾の蠅」は木曾路の旅の「うさ」を象徴するもの、旅人を悩ますものとして選ばれたのであろう。しかし、木曾路の旅のつらさを象徴するものとしてなぜ芭蕉は「蠅」を選んだのであろうか。もちろん「馬」と「蠅」とが付け合いであるから、馬で旅立つ許六にふさわしいものとして選んだということは充分に考えられる。しかし、それだけの理由であらうか。

稿者はこの餞別句における「蠅」という季語の選択および「木曾の蠅」の語句に、許六との具体的な交流を踏まえた上での、芭蕉から許六へのメッセーが込められているのではないかと推測する。そこで以下において、芭蕉、蕉門俳人、許六らの「蠅」の句について検討を加えながらそうした推測の妥当性を探っていくことにする。まず、芭蕉にとつて「蠅」がどのような季語として扱われ、詠まれてきたのかを見ておくことにする。意外なことに芭蕉発句のうち「蠅」の季語を用いているのは、現在知られる限りでは、この「うき人の」の句一句のみとなっている。夏の旅の発句を多く含む『奥の細道』にも「蠅」を詠んだ句は一句も見られない。

連句に目を移すと、芭蕉が「蠅」を詠んだ付け句として元禄二年十一月一日に興行された「いざ子ども走ある

かむ玉霰」を発句とする歌仙の八句目（初折ウラ二句目）に次の句があった。七句目から九句目にかけて挙げてみる。

- 7 鶏頭の愛なき窓にうち折まれて 良品
 8 物喰くうちの蠅の苦しさ 芭蕉
 9 常ながらのし乾侘る海士の妻 三園

鶏頭の花が何の趣もない窓先で折れたまますがれているという景を詠んだ前句を受けて、芭蕉はそうした住まいの中で食物にたかる蠅を苦ししながら食事する人物の様子を付けている。前句が「鶏頭」で秋の句であるので、八句目の芭蕉付け句も前句に付けられた時点では秋の蠅を詠んだ句として解釈され、九句目で雑の句が付けられた時点で夏の蠅の句として読まれることになり、季移りの句となっている。

さらに、芭蕉が一座する連句作品の中で蠅が詠まれているものとしては、次の四例が見られた。発句の場合は脇句とともに示し、付け句の場合は前後の句とともに示す。

- ①「蠅ならぶ」歌仙 元禄四年七月中旬頃興行
 1 蠅ならぶはや初秋の日数かな 去来
 2 葛も裏ふくかたびらの皺 翁（芭蕉）

- ②「破風口に」歌仙 元禄五年六月頃興行
 1 破風口に日影やよはる夕涼 芭蕉
 2 煮レバ茶ヲ蠅避レク烟ヲ 素堂
 3 合レ歡醒ニ馬上一 素堂

③「雪や散る」半歌仙 元禄六年冬興行

3 唐がらし木ながら軒に打かけて 岱水

4 秋来てよはる鍋蓋の蠅 依々

5 朝／＼は布子をはをる暮の月 曾良

④「水鶏啼と」歌仙 元禄七年五月二十五日興行

10 雨の降日をかきつけにけり 翁(芭蕉)

11 炮烙ほうらくのもちにくるしむ蠅の足 川12 蘭を刈あげて門かどにひろぐる 覽

①から④までいずれも日常卑近で実際に目にする蠅の姿が詠まれており、蠅の句に続く付け句も「かたびらの皺」「布子をはをる」「蘭を刈りあげて」など日常生活の地味でわびしい場面が取り上げられているものがほとんどとなっている。しかも①と③の歌仙における蠅は秋になって弱っている蠅であり、②と④の場合にも煙を避ける蠅、あるいは「もち」に足を取られて苦しむ蠅が詠まれるなど、いずれの場合も蠅の卑俗性、滑稽性よりも、生き物としての蠅のあわれさに目が向けられているところに特色が見られた。先に見た芭蕉の付け句「物喰うち」の蠅の苦しきさは蠅に苦しむ人物をその心に寄り添って詠んでいたのに対して、①から④の連句中では蠅の側のあわれさ、苦しさが詠まれており視点が異なるとは言え、どちらもわびしい生活実感を伴う日常性の中で蠅が捉えられている点では共通の姿勢が示されていると見ることが出来るだろう。

このように芭蕉および芭蕉と一座した連衆たちの間では、蠅は生活実感に基づいて詠まれる季語であり素材であり、夏の蠅よりはどちらかといえば秋の蠅が好んで詠まれる傾向にあったことを確認することが出来た。ただし

注意したいのは、これらの連句作品の制作年次がすべて元禄二年冬以降という芭蕉の晩年に興行されたものばかりであったという点である。

三

実は、深川隠棲以前の芭蕉、すなわち桃青号を用いて談林俳諧宗匠として活躍していた当時の芭蕉周辺においては「蠅」が卑俗性、滑稽性を強めるための素材として積極的に用いられていた様子を確かめることが出来るのである。たとえば延宝八（一六八〇）年に刊行された『桃青門弟独吟廿歌仙』は、桃青（芭蕉）の門人二十人（実際は付録も含め二十一人）による独吟歌仙集であるが、そのうちの二歌仙が蠅を詠んだ発句を用いており、三歌仙中に蠅の付け句を見ることが出来た。

第一歌仙 杉風

- 1 誰かは待蠅は来りて郭公はつとぎす
- 2 あほう有ける世中の夏よのなか

第二歌仙 踞斎卜尺

- 14 心は南冥のうつばりに止ル
- 15 山ヲ負蠅の夕暮来てミレバおふ
- 16 徳利の底の国をあらはず

第三歌仙 巖泉

- 1 蠅と成て昼寝の心栩々然タリ

2 爰三に国あり蚊の角の先

第十二歌仙 揚水之

- 9 食めしひつ櫃びつやみれば網代のした簾
 10 我わがみ身を蠅むしになさばやの恋
 11 それさまに殺さるゝ共うたるゝ共

第十三歌仙 嵐亭治助

- 24 蜘蛛くもは古巢こくにかへれども歌ハ
 25 翅つばさもぐ蠅むしの初音はつねもあはれ成
 26 竹の若葉わかしよにみゆる灰吹

まず、二十歌仙の冒頭部にあたる第一歌仙から第三歌仙に続けて蠅の句が詠まれていることが目をひく。とくに第一歌仙の発句が蠅の句であることはこの作品全体における蠅という素材の重要性を示すものと受け取れるだろう。

その詠みぶりは先に見た元禄期の蕉風連句中における蠅のとらえ方とは全く異なるものであり、詩歌の伝統や典拠を踏まえながら、そこに卑俗性の強い俳言としての「蠅」を投げ込むことで強い違和感をもたらし滑稽性を強める効果をねらうという典型的な談林俳諧の詠風を示すものとなっている。

たとえば第一歌仙の発句「誰かは待蠅ハ来りて郭公」は、夏のはじめに鳴き声が待たれる伝統的素材としての「ほととぎす」と対比する形で、誰にも待たれていないのになやってくる蠅を出すことで滑稽性を出した句となっている。また、第二歌仙の十五句目「山ヲ負蠅の夕暮れ来てミレバ」は、『莊子』「応帝王篇」中の「蚊ヲシテ山

ヲ負ハシム」(分不相応の大きな仕事をさせることのたとえ)の「蚊」を、前句の「うつばりに止ル」からの連想で「蠅」に替えたものであり、一句全体としては『新古今集』の能因の和歌「山里の春の夕暮来てみればいりあひの鐘に花ぞちりける」のもじりとなつてゐる。第三歌仙の発句「蠅と成て昼寝の心栩栩然タリ」も『莊子』「齊物論」の「胡蝶の夢」の故事中の「昔ハ莊周夢ニ胡蝶ト為リ、栩栩然トシテ胡蝶也」の表現を踏まえて胡蝶を蠅に替えることで滑稽性を出しているものである。第十二歌仙の十句目「我身を蠅になさばやの恋」は、『伊勢物語』六十九段の業平の和歌「吹く風に我が身をなさば玉すだれひま求めつつ入るべきものを」のパロディーであり、簾の奥にいる女性を吹く風となつて訪れたいと願うみやびな王朝の恋に對して、前句の「食糧」にふさわしく「蠅」になつて訪れたいと卑俗化したものである。第十三歌仙の二十五句目「翅もぐ蠅の初音もあはれ成」は、前句の「蜘蛛」の巣に捕らえられたものとして「蠅」を出し、和歌の世界で賞される「鶯の初音」「ほととぎすの初音」ならぬ「蠅の初音」の語を造語して滑稽性を強めている。

以上のようにいづれも伝統や典拠を踏まえながら、そこに「蠅」という卑俗な素材を持ち込むことで滑稽性を生み出す効果が挙げられていることが確認できた。これらの歌仙は「桃青門弟」たちによつて作られたものであり、桃青(芭蕉)自身の作というわけではないが、そこに指導者としての芭蕉の関与がまったく無かつたとは考えられず、門弟たちが示している俳風や素材の扱い方などには当時の芭蕉の俳諧上の志向が反映していたと推測される。したがつて延宝期においては芭蕉も蠅を卑俗性、滑稽性を増大させる素材として句中に用いる詠みぶりを容認していたものと考えられる。やがて芭蕉自身はこうした作風と訣別し、元禄期の芭蕉一座連句においては生活の中でのわびしさ、あわれさを想起させる日常的素材として蠅が詠まれるようになっていたことは先に見た通りである。

しかし、芭蕉門人の中には、延宝期以降も滑稽性を強める素材として蠅を扱う句を詠み、元禄期にも芭蕉とは対照的な詠風を示す俳人が存在していた。それが芭蕉の高弟其角である。いま管見の範囲で見出せた其角の蠅の発句を収載俳書の年次順に示してみる。

- A 蠅なくば一はな折ん夏の菊
土さへさけててる日にも
 (貞享3 『新山家』)
- B 蠅追おふに妹忘れめや瓜作り
射ル者ハ中リ突スル者ハ勝ツ
 (貞享4 『続虚栗』)
- C 蠅打うちよ何れにあたる点心
仏骨表
 (元禄3 『花摘』)
- D しばらくは蠅を打けり韓退之
信濃へまいらるゝ人暇乞せらる餞に
 (元禄3 『花摘』)
- E 梁の蠅を送らん馬の上
旅店
 (元禄3 『花摘』)
- F 富士の雪蠅は酒屋に残りけり
逐欧陽公賦
 (延享4 『五元集』)
- G 蠅の子の兄に舜なき憎さ哉
 (延享4 『五元集』)
- H 驥の歩み二万句の蠅あふぎけり
 (延享4 『五元集』)

右に挙げた発句のうち、Hは貞享元(一六八四)年に其角が西鶴の矢数俳諧興行の後見を務めた折の句であり、A、Bとともに元禄期以前の作であることがはっきりしている。C、D、Eはすべて元禄三年夏に亡母追善の一夏百句として詠まれた句であり、F、Gは作句年次未詳である。しかし、こうした作句年次による詠風の違いは見られず、むしろ一貫した蠅の詠み方、とらえ方が浮かび上がってくる。

一つは典拠や故事、ことわざなどを踏まえた表現を用いて句作する姿勢である。たとえばBは『拾遺集』の和

歌「六月の土さへさけて照る日にも我が袖干めや妹に逢はずして」をもじった句であり、Cは欧陽修「醉翁亭記」〔古文真宝〕所収〕に見える、山中で楽しむ人々の様子を述べた「射ル者ハ中リ奕スル者ハ勝ツ」の一節を踏まえた上で「蠅打」を詠んだものであり、Dは韓退之「論三仏骨一表」に対する批判意識に基づいて、韓退之を嘲る意を込めて蠅を打つ韓退之を趣向したものであり、Eはことわざ「梁の燕」をもじって信濃へ赴く人（弟かと言われる）に餞別として自分にとつては邪魔な「梁の蠅」を送ろうと興じたものであり、Gは欧陽修「憎蒼蠅一賦」〔古文真宝〕所収〕に倣って蠅の憎らしさを詠むが、そこに聖王舜に悪い弟がいた故事を踏まえ、憎まれものであつても兄に舜のような偉大な人物がいれば許せるが、蠅にはそんな兄もないので、よけいに憎さがつのと詠む。このように典拠に基づきながらそこに蠅という卑俗な素材を持ち込むことで滑稽性を出そうとする姿勢を見ることができるといえる。

また、A「蠅なくば」、B「蠅追」、C「蠅打」、D「蠅を打」、G「憎さ」、H「蠅あふぎ」などの語が示すように、蠅を邪魔なもの、憎むべきものとして追い払ったり打ったり扇いだりする対象と捉えて詠む姿勢も一貫して見られるものであった。表面上はこうした語句を用いていないFの句においても、「富士の雪」という、雄大で白く美しく、夏の間に一度消えるがその夜にはふたたび降り積もると言い伝えられる神秘的で清浄なものとは対照的な存在として、すなわち微小で黒く醜く卑俗なものとして蠅が詠まれている。ちなみに其角の蠅の句はすべてが夏の句であり、秋の蠅が一句も詠まれていないところにも、こうした蠅のとらえ方が反映していると考えられる。

さらに、右のとらえ方とも関連するが、蠅そのものに焦点を合わせた句よりは、蠅を追ったり打ったりと蠅と関わる人物やその姿に焦点を合わせて滑稽性を漂わせながら詠んでいる句が多く見られた。こうした視点の据え方はGの句が踏まえた欧陽修の「憎蒼蠅一賦」における蠅の害とそれを追い払おうと奮闘する人々とをユーモラスな筆致で描いた態度とも共通性を見せるものである。ただし欧陽修の賦が諧謔性ある表現の裏に諷言する小人への批判、という政治的意図を込めているのに対して其角の場合にはそうした意図は見られず、表現上の類似

にとどまっていると云える。

このように見てくると、其角の蠅の句は『桃青門弟独吟廿歌仙』に見られる延宝期の芭蕉（桃青）門人たちの蠅の句の詠風の延長線上にあるものと見ることが出来るものであり、⁶典拠や故事を踏まえながらそこに卑俗な素材としての蠅を持ち込むことで滑稽性を強めようとする詠みぶりや、蠅を邪魔なもの、醜いものと規定し蠅を打ったり追い払ったりする人物に焦点を当てそれを滑稽に表現しようとする姿勢は元禄期以前も以後も変わるところがなく、其角の蠅の句の一貫した特色として認めることができるものであった。

四

前節までの検討を通じて、元禄期における芭蕉と其角との蠅の捉え方には大きな違いのあることが確認できた。それはそのままこの時期の両者の俳風および俳諧表現における志向の違いとしても理解することができるものであったが、そのことと関連して注目されるのが、許六が元禄四年に江戸へと向かう道中で蠅の句を詠んでおり、その句が其角によって高く評価されていたという事実である。許六が延宝五年から元禄六年冬に至るまでの間に成った自作の漢詩・和歌・発句・俳文などを書き留めた自筆稿本『五老文集』の元禄四年十月の項に次の記述が見える。⁷

ことし六月の末に此北海道を下りしころのあつさに引かへたる事よ。此時を上ルに善光寺へ詣つる法師ばらの背にいみじく蠅の取つきたるをみて

信濃路や蠅にすはる、瘦法師

此句、江戸にて其角にかたりければ秀逸とて感じ侍ける。

すなわち、元禄四年六月の江戸下向の旅の途次に善光寺詣でをする法師の背中に蠅が群がりたかっているさま

に目を留めて許六が作った発句「信濃路や蠅にすはる、瘦法師」を江戸で其角に示したところ、秀逸の句として感心されたというのである。実際に其角がこの句を高く評価していたことは、許六自筆稿本『五老文集』中の右の引用箇所において「信濃路や」の発句右上に其角の批点（長点）が書き入れられていることから確かめることができる。

ここで許六と其角との交流について簡単に押さえておくと、両者の交流は許六が芭蕉と対面を果たす以前の元禄四年夏の許六の江戸滞在時に始まったと考えられており、許六が自句への批点を其角に乞い、指導を受けていたことが知られている。「信濃路や」の句はまさにこの時期に其角の批点を受けた句の一つだったのである。のちにはこの当時の其角からの指導について「俳諧稽古に益なし」（『俳諧問答』所収「俳諧自讃之論」）と否定的に述べるようになる許六だが、芭蕉に対面する以前においては「其角を通して蕉風の風儀を己のものにしようとしていた」ことが指摘されている。^{〔8〕} ちなみに元禄五年の春には、先に挙げたCとEの蠅の発句が収まる其角の『花摘』一冊を彦根の五老井において書写しており、この時点においても其角への傾倒が続いていたことを知ることができる。「信濃路や」の句が其角に評価された元禄四年夏の時点では、其角の指導のもとで蕉風を学ぼうとしていたわけであるから、其角からの「秀逸」という評価および長点という批点を得たことは許六にとって嬉しく誇らしい出来事であったに違いない。

ここで「信濃路や」の発句の内容の方に目を向けてみると、一句は信濃路の旅中で見かけた、蠅が背中に群がっている痩せ法師の姿を、まるで蠅に養分を吸い取られているようだと思われて表現したものである。これは蠅とかわかる人物に注目し滑稽感を漂わせて表現している点で先に見た其角の蠅の詠みぶりと一致するものであり、其角が高く評価したのも当然の句であると言えよう。

では、芭蕉はこの句に対してどのような評価を下したであろうか。次にその点について検討してみたい。実はこの句に対する芭蕉の批点は『五老文集』には書き込まれていないのである。そこからは二つの可能性が浮かんでくる。一つは許六が芭蕉にこの句を見せなかった可能性であり、もう一つはこの句を見せたものの芭蕉からま

まったく評価されず点がつかなかつたために批点の書き入れも残されなかつたという可能性である。私は後者の可能性、つまり許六がこの句を芭蕉に見せたものまったく評価されず点を得ることができなかったのではないかと推測する。以下、その根拠を提示しつつ考察していきたい。

まず、芭蕉にこの句を見せただろうと推測する根拠としては、この句と同じ元禄四年の東下の旅で詠まれた句であり、江戸で其角の批点を得ていた「かけ橋のあぶな気もなし蟬の声」の発句（『五老文集』には「掛橋やあぶなげもなき蟬の声」の句形で収録される）を許六が芭蕉に見せていたことが挙げられる。そのことについて述べている「俳諧自讃之論」の文章を引用する。¹⁰

予明年七月、又東武に赴く。此時翁に对面せむことをよろこぶ也。（略）江戸着の日数を経ず、桃隣手引して八月九日深川の庵をた、き、師弟契約の初め也。一座嵐蘭・桃隣・浄求法師也。桃隣いひけるは、「翁へ発句持参あるべし」といふにまかせ、桃隣執筆して四、五句初めて呈す。

七月十四日夜、嶋田、金やの送り火を見て感をます

聖霊とならで越えけり大井川

十団子も小粒に成ぬ秋の風

かけ橋のあぶな気もなし蟬の声

我跡へ兎唇立寄清水哉

此外もありし、おぼえず

師見終わりに云く、「就中うつの山の句、大きに出来たり。其外清水、かけ橋の句もよし」と数篇感ぜられたり。

右からわかるように、初対面の芭蕉に許六は自句の一つとして「かけ橋の」の句を見せたことを記しているが、この句は「信濃路や」の句と同じ元禄四年六月の東下の折の句であり、江戸で其角に見せていたことは『五老文

集』においてこの句の上に其角の批点(平点)が書き入れられていることから明らかである。さらに『五老文集』中には

夏ころ不破のせきにて

頬あてや土用干する不破の関

此句ならびにかけ橋の蟬の句、嵐雪がほめたれば、又爰にのせたり。

という記述も見え、「かけ橋の」の発句が嵐雪によって高く評価された句であったことを知ることができる。

翻って考えてみると、初めて対面する芭蕉に自句をみせる訳であるから、許六としてはこれまで詠んだ自句の中からとくに自信のある句を選んで提示しようとしたことが想像されるのであり、その自信ある句の中には当然ながら芭蕉以前に指導を受けた蕉門俳人である其角、嵐雪によって高い評価を与えられていた句も含まれていたであろうと推測される。「かけ橋の」の句は其角からは平点という評価であったが、嵐雪からは高く評価された句であったので自信をもって芭蕉に提示したものであろう。とすれば、其角から「秀逸なり」と評されて、長点を得ていた「信濃路や」の句についても芭蕉に見せた可能性はかなり高いと考えられるのではないだろうか。

そして、芭蕉にこの句が示されたとした場合、芭蕉が評価せずまったく点を与えなかっただろうと推測する根拠としては、この時期の芭蕉の俳諧上の志向および蠅の捉え方とこの句との間にある大きな懸隔を挙げることができる。

先にも見たように元禄期の芭蕉連句における蠅は、わびしい生活実感を伴う日常的素材の一つとして詠まれており、蠅に苦しむ人を詠む場合にも、その姿に滑稽性を見ようとする姿勢は示していない。これに対して許六の「信濃路や」の句は、背中に蠅がたかっている痩せ法師の外面的な姿態のみに注目し、その姿をまるで蠅に養分を吸い取られているようだと思じ、作意ある表現によって描いており、そこには蠅にたかられている痩せ法師を突き放して、あるいはやや見下して眺めている気配が漂っていると感じさせられるのである。こうした句を、自ら「後に笈をかけ草鞋に足をいため、破れ笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめ」た旅である『奥の細道』の

旅を体験し、旅の辛苦を味わい尽くしていた元禄五、六年当時の芭蕉は決して評価することはできなかったであろう。もし許六からこの句を示されたとしても、芭蕉がこの句を評価せず点も与えなかったであろうことは確実と思われる。あるいは厳しく批判したことさえ想像したくなるほどである。

さらに、芭蕉との初対面の折りに、自句に示された芭蕉の評価がそれまで受けていた其角の評価とは大きく異なるものであったことに許六が不審の思いを抱き、それを芭蕉にぶつけたことが「俳諧自讃之論」の回想から明らかとなっている。

予、高翁ニ対面せざる以前、晋子が方へ此頃点を乞句、百四、五十あり。予がよしとおもふ句ニは点稀にして、いひ捨の句ニ褒美の点あり。今日師の感じ給ふ句、大方一点の句也。然所に師殊の外ニ感給ふ。予が不審こゝにあり。師の高弟は晋子也。師弟の胸旨、ヶ様ニかはりては頼母しからず。畢竟俳諧はいひ勝と決定し侍るなり。

右の引用によれば、其角の評価が低かった自句を芭蕉が高く評価したため、許六は不審を抱いたという。また、先に引用した初対面の折りに芭蕉に提示した句として挙げている四句はすべて芭蕉に賞賛された句ばかりとなっている。

しかし、もし其角には評価されなかった句ばかりを許六が芭蕉に呈示したのだとすれば、初対面の元禄五年八月の時点ですでに許六が其角の指導に批判的な目を向け、俳書を通して学んだ芭蕉の俳風を生かした自句のみを自信作として示したということになり、それらの句が芭蕉から高く評価されたとしてもそれは当然のことと受け止められたはずで、不審を抱くことはなかったと思われる。むしろそれまでは指導者としてある程度信頼していた其角によって高く評価された句が芭蕉によつては低い評価しか与えられなかったからこそ不審の思いを抱いたのではないだろうか。少なくとも芭蕉に呈示した句の中には、其角によって高く評価されながら、芭蕉によっては評価されなかった句も含まれていたはずではないかと推測される。その場合、そうした例に該当する句の一つ

として「信濃路や」の句を挙げるができるだろう。

五

これまでの検討を通じて、元禄期における芭蕉と其角との蠅のとらえ方、詠みぶりに大きな違いが見えること、そして芭蕉への入門の一年二ヶ月ほど前に当たる元禄四年六月の東下の旅中において許六が詠んだ「信濃路や」の句が其角の蠅のとらえ方と合致する詠みぶりを示すものであり、当時指導を受けていた其角から秀逸という高い評価を得ていたことを確認した。その上で、其角から高く評価された「信濃路や」の句を芭蕉に見せた可能性が高いだろうと想定し、もし芭蕉がこの句を見ていたとするならば、この句に見られる蠅に苦しむ旅人の心に寄り添うことなく、その姿の奇異に興ずるような視点を芭蕉が評価するとは考えられず、『五老文集』のこの句の上に芭蕉の批点の書き込みがなされていないのは、芭蕉がまったく点を与えなかったからではないかという推測を示した。さらに許六が自句に対する其角の評価と芭蕉の評価の間に大きな違いのあることに不審を抱き芭蕉にそれを質したことが後年の回想である「俳諧自讃之論」に述べられているが、その折に評価に違いが見られた句として挙げられているのがすべて其角によつてはあまり評価されず、芭蕉によつて高く評価された句ばかりとなつているのは不自然であり、其角に高く評価されながら芭蕉によつては低い評価しか与えられなかった句も当然あったと想像され、その場合「信濃路や」の句はまさに其角に高く評価されながら芭蕉からは評価されなかった句の例に該当するだろうことを指摘した。

ここまでの推測がもし正しいとするならば、芭蕉が許六に送った饞別句「うき人の旅にもならへ木曾の蠅」は許六の発句「信濃路や蠅にすはる、瘦法師」の発句の内容を念頭に置いた上で、これからの木曾路の旅では、蠅にたかられて苦しむ旅人の姿に興じる側ではなく、自らが蠅にたかられて苦しむ旅人の側に立つて旅を行えよ、とのメッセージを伝えようとしたものと捉えることができるのではないだろうか。

そして、もし仮りに芭蕉の方にはそのような意図がなく、単に夏の旅の辛苦の一つとして蠅を取り上げて用いただけであつたとしても、許六にとつては、「うき人」の心にならつて蠅に苦しみつづ木曾路の旅を行えよという餞別句の内容は、かつて詠んだ「信濃路や蠅にすはる、瘦法師」という自句における、蠅に苦しむ法師の捉え方を反省させられるものであり、身を痛め苦しみつつ旅することの大切さを伝える芭蕉からのメッセージとして心に深く受け止められるはずのものであつたことは確実であると言えるだろう。

注

- (1) 拙稿「椎の花の心」考（『日本文学』五十六巻四号、平成十九年四月）
- (2) 井本農一編『新編日本古典文学全集 松尾芭蕉集一』小学館、一九九七年
- (3) 『俳諧類船集』には「馬」の項に「蠅」、「蠅」の項に「馬」が付け合い語として挙げられている。
- (4) 『桃青門弟独吟廿歌仙』は、東京大学附属図書館竹冷文庫本を底本として翻字し、私に濁点等を付した。
- (5) 『本朝文選』では其角の「嘲仏骨表」と題した俳文に続いて「しばらくは」の句が置かれている。
- (6) 其角は螺舎号で『桃青門弟独吟廿歌仙』に独吟歌仙を載せているが、歌仙中に蠅の句は見られない。
- (7) 引用は俳書叢刊『五老文集』（天理図書館、昭和32年刊）による。
- (8) 尾形仿「芭蕉と許六―許六の芭蕉入門前後―」（『芭蕉研究』第二輯、昭和十八年十二月）
- (9) 注8の尾形論文において許六が書写した『花摘』が紹介されている。
- (10) 「俳諧自讃之論」の引用は『蕉門俳論俳文集』（古典俳文学大系10、集英社、昭和四十五年）所収本文による。